

釣れ釣れなるままに

2003年思い出の釣行記 PART. 1

自己顕示欲



遊会第1回大会

開催日	平成15年4月20日
開催場所	須築港～中歌港
入釣場所	島歌川右岸
潮	満潮 07:15 18cm 干潮 11:19 9cm
天気	春はしばらく暖かいが続いた。しかし、2・3日前には春の嵐が吹き荒れ、久しぶりに冷え込み、山間では雪が降った。前日までは雨の予報である。早めに前線が通過し今夕から明朝は晴れる。波も2m～3mと予想。雨のため雪白水が心配である。
釣果	カジカ 2匹 アブラコ 390mm 1匹 ホッケ 413mm 2匹 重量 3370g
成績	合計 1140点

成績	3 位
持ち点	3 点
累計点	3 点

釣り四方山話

正月2日、『カナダ屋釣具店』の新春大売り出しがあった。平日と比べると軒並み半額近い商品が並び、指を銜えて眺めるだけだったものにも手が届くようになっている。この機会に竿とリールを1セット購入する。竿はシマノのサーフリーダーCX-T30(35,000→25,600)、リールはダイワのサーフZ35A(35,500→28,400→9,800)、である。使用していたダイワのトーナメントサーフ35Tは、取っ手の部分が折れてリールシートに嵌めることができず、紐で竿に括り付けて使っていたのだ。

今年の春は暖かい日が続き、雪解けも例年になく早く進んでいる。しかし、大会日の3日前から春の嵐とともに急激に冷え込み、雨も雪に変わった。数日前の天気予報では大会日も雨を告げていたが、前線が早めに通過し、大会日の夕方から朝方にかけては晴れると変更された。波も2mと予想し穏やかな釣りが出来そうである。雨のための雪白水だけが心配である。

大会の前日、夕飯にと岩見沢のラーメン店に行く。この店は頗る評判がよく、いつも満席で列を作って並ばなければならない。この時も店は盛況であり、順番を待っていると、『北海道釣名人会』の佐々木忠義氏が奥様と一緒にテーブルについて注文したラーメンを待っていた。早速、釣り四方山話に花を咲かせる。今回の大会での入釣場所にも話が及び、懇切丁寧に指導して下さる。雪白水は心配ないということであり、ホッケのエサには〇〇〇〇〇〇（聞いた話なので自分で効果を確認するまで明かせない？）がよいと言う。新鮮なものは海水に浸けると花が開いたようになり、それがホッケを刺激するらしい。また、他の魚種にも有効であり、太平洋でも実証済みなのだそうだ。

「明日の大会は島歌川を予定しているがどうでしょう」

「島歌川はよいが、釣り人で混むぞ。誰かさんが『北海道のつり』に紹介記事を載せたらしい。あっ、釣狂ってオマエだったか」

延々と話が続くものだから、奥様も苦笑されている。注文したラーメンがテーブルに出てきたのをきっかけに一旦終了させたが、私も隣のテーブルに案内されたものだから話がさらに続いた。

爆釣モード

大会日、早速、例のエサを購入して集合場所に向かった。午後7時前であり、私が一番乗りであった。話し相手もおらず、一人侘びしく缶ビールを取り出し、グビッと一気に飲み干す。大前事務局長がやって来た。彼は大会審査用具一式から賞品の準備、団体戦の組み合わせ表、さらには、煙草の吸い殻で集合場所を汚さないようにとスタンド式灰皿まで

用意している。彼の誠実な人柄や釣遊会への献身的な尽力には本当に頭が下がる。

事務局長の車からそれらの荷物を下ろしているうちにも、今年度の大会に向けての意気込みを漲らせて会員が続々と集合してきた。そして、納竿期の鬱憤を晴らす機会の到来に歓喜の胸の内を披露し合うのである。本日の大会に向けて大会範囲の下見を入念に繰り返した会員も数多くいた。彼らは一足早い春の訪れを楽しんだようである。もちろん私は例のごとく本日の大会が今年度の始竿である。バスに乗り込むと、早速、1年間の奮闘を誓い合い酒が酌み交わされ、酒の量が増すにつれて、誰もが縛釣モードになってくるのは恒例のことである。

今回の入釣場所は昨年度優勝した島歌川を決め込んでいるが、果たして如何であろう。昨年度は閑散としていたが、優勝した記事が「北海道のつり」に載ったことにより多くの釣り人が来ていると言う。嬉しいことなのか悲しいことなのか。釣りを愛する皆さんが記事を頼りにすることはいいのだが、私が見つけたつむりの穴場が寂れていくのはいただけない。まあ、私自身も「北海道のつり」を頼りにしているのだから致し方ないところか。

島歌川には案の定、恵庭や小樽の釣り会の面々が所狭しと並んで入釣していた。昨年度大漁したポイントも押さえられている。私は予定を変更して川の際に三脚を立てた。しばらくアタリのないまま時が経過していったが、ようやく遠投の竿にアタリがあり、35cm程のホッケがあがってきた。続けて赤みを帯びて丸々と太った旨そうな40cm程のホッケもあがった。またアタリが途絶えたので、隣の様子を伺いに行く。彼はホッケと30cmほどのカジカを手にしていた。彼の会の審査方法は1匹身長5匹重量制であるので物足りないところぼしている。いつもは2魚種をそろえるのに四苦八苦している自分は、なにを贅沢言っているのかと思うが、1魚種になってみると寂しい気もする。さらに奥の釣り人はいまだボンズである。

自分の場所に戻って、餌を替えるために竿を上げると25cm程のカジカがついていた。ここでは嫁はいつでも取れると思うが来てもらわないことには不安が募る。

名人の釣技に啞然

嵐氏が様子伺いにやって来た。彼が入った所はアタリもなくさっぱりであり、私の僅かな獲物を見て隣に入るといふ。彼が並ぶとなると厳しさを覚悟しなければならない。彼は名うての釣り師であり、彼が打った周辺には全ての魚がいなくなるのである。そう思っている矢先に嵐氏がやって来た。移動も素早い。そして、大岩がゴツゴツして大変足場の悪い所に竿を設置した。

私の方はさっぱり釣れなくなる。彼の隣だとかちらが気後れしてしまうせいもあるが、魚が嵐氏の方へと移動し始めたのだ。今度は、吉井氏の様子を伺いに行く。島歌川を渡って彼に近づいて行くと、盛んに竿を振っている。「今、やっとアブラコが来たばかりだ。もう少しやってだめなら白岩漁港に向かおうと思っている」彼のバツカンを覗くと35cm程のものがようやくという素振りが入っていた。

嵐氏が場所を僅かに移動した。その途端、待望のホッケを釣り上げた。そして、続けざまに40cmを超えるアブラコである。こちらの竿はピクリともしなくなった。さもありなん。嵐氏の爆弾に負けているのである。何を混ぜ込んでいるのだろう。私のものは市販品をそのままネットに入れているだけである。嵐氏の仕掛けを覗き見る。次から次へと様々なものに替えては打ち込んでいる。ハリに付けたエサの種類も豊富でしかも新鮮である。イカゴロは今まさに刺身用のイカから取り出したと思われるようにプックラと赤白く光り輝いている。

空が白々と明けてきた。嵐氏がカジカ45cm程を抜き上げた。さらに竿を大きく曲げて大物と格闘している。海面を見ると大きな三角の^{ひれ}鰭がさざ波を立てながら近づいて来るではないか。例えとしては大げさかも知れないがジョーズが迫って来るワンシーンの如くである。嵐氏は魚を抜き上げずに、波打ち際に放置している。そして竿を三脚に立て掛けてから徐に獲物に近づく。どんな大物かと彼に近寄ると、尾ビレに別のハリが突き刺さり^{しやちほこ}鯨の様になっていたのである。どうりで巨大魚の様相を^{かも}醸し出していたのだ。カジカは岩があると、そこに落としてもその場を動かないということだ。そんなことを知らない私は無理に引っ張り上げては取り逃がしていることが多い。

お裾分け

嵐氏は近投での獲物ばかりである。昨年、私が入釣して優勝した時は、遠投ばかりに獲物がかかり、近投には全く魚が居る気配を感じるなどなかったのだが……。彼の特殊爆弾の威力が沖の魚をも呼び寄せているらしい。私も嵐氏の仕掛けが飛んだ辺りに幅寄せして近投する。嵐氏よりはるかに小型の35cm程のカジカが2匹来た。やはり彼の爆弾は^{すき}凄まじいものなのだ。ホッケも来るようになった。

遠投の竿に、よいアタリが出た。しかし、後が続かない。しばらくして今度はジワーッと竿先が海に引きずり込まれていく。そして右の方にゆっくりと移動していった。タコだ。大きく煽り、リールを巻く。キリキリキリキリとリールが悲鳴を上げているが、少しずつ寄って来る。しかし、途中の駆け上がりで引っかかった。岩から引きはがそうと強引に竿を煽ると、ふっと軽くなり後ろにひっくり返ってしまった。隣で嵐氏が大笑いをして転けている。

8時頃、嵐氏が爆弾を入れていたバツカンが島歌川で洗っている。川が白く濁り、沖に向かって流れ出ていく。川筋に移動していた私に魚を釣らせようとする心積もりらしい。点数では私を大幅に引き離して余裕の釣りである。その効果がすぐに表れ、私にも40cm程のアブラコが来てくれた。さらに、ホッケがパタパタと続いた。

審査結果

優勝	嵐	光博	1311点	(カジカ 459mm+アブラコ414mm+4380g)	島歌
準優勝	岡	英成	1160点	(アブラコ409mm+ホッケ 409mm+3420g)	切梶
3位	鹿島	釣狂	1140点	(ホッケ 413mm+アブラコ390mm+3370g)	島歌
4位	阿部	重義	1121点	(アブラコ442mm+ホッケ 338mm+3410g)	吹込
5位	安曾	和夫	1037点	(ホッケ 375mm+カジカ 367mm+2950g)	中歌



自画自賛

岩見沢釣遊会に君臨する嵐氏は、決して自分の釣果をひけらかさない。どんなに大釣りしてもいつも飄々^{ひょうひょう}としている。釣技に関してももちろんである。

吉田兼好が著した『徒然草』の中に、自画自賛の場面が出てくる。「友近（御隨身近友）が自賛7か条を書いた故事がある。いずれも馬芸に関するもので、たいしたことはないが、それを、前例とし、自賛したいことが7つある」というのだ。兼好ともあろう方がなぜそんなだらし無いことをしてくれるのか。口惜しい気持ちになる。愛読していた『徒然草』が急に薄汚れているような錯覚に襲われた。私の釣行記のタイトルを『釣れ釣れなるままに』としているのは語呂がいいからばかりではない。兼好ほどの人には考えられないほどの筆の誤りとしか言いようがない。ショックである。

自慢話、手柄話ばかりをする人間は得てして敬遠される。鼻持ちならないのである。ことに釣り人にそれが顕著に表れる。かつての輝かしい釣魚を蒸し返して聞かせる。大物を釣ったことは楽しいことであろうが、聞かされる側はたまったものではない。年寄りが自

慢する光景には微笑ましいところもあるが、若い者が延々と手前味噌を並べるのには常に鼻白む思いをする。それを遠慮して表に出さないから、話している方は感心しているものと錯覚していることが少なくない。釣り人が嫌われる理由の一つである。

なぜ、して楽しい釣り自慢が、聞いておもしろくないのか。他人が大きな魚を捕り損なった話なら、同情しながらもひそやかに喜びを感じることもある。残念だったねと慰めるのは、隠れた優越感を伴う。古来、物語や歴史は、多くそういう失敗、不幸、犯罪、悪事をネタにして生きてきたのである。

自慢話がおもしろくないのは、それを聞く人に出る幕がないからである。しかも自分に影が差していけない。

モンテニューが、噂について言っている。

「他人からの借り物（噂）に何か利息を付けず、そのまま返すのは何となく気が咎（とが）める。」我々は釣り人の自慢話を聞くとき、いつもその利息、おまけをつけて納得しているものである。手放しの自賛、手柄話などを聞かされたのでは、つけたくても利息もおまけもつけられない。そういう時人はおもしろくない。嫌気がさして不機嫌になるのである。まれに嬉しいと感ずるのは話に合わせてうんうんと肯きながら、その話の中に垣間見える穴場や技を盗み聞くことが出来た時である。

昼食時や帰りのバスの中では、恒例の如く本日の釣りについての話に花が咲く。成績が悪いつの間にか寡黙になっている自分に気がつくが、今日は比較的よい釣りをしたので口も滑らかになる。もちろん嵐氏や岡氏、阿部氏の口は快調の極みである。その口から漏れ伝わってくる穴場や技に思いを巡らせながら次回の大会に夢をはせるのである。

完

【つれづれ】

18日（金）は、早朝より岩見沢で職務上の会議があり、今回は芦別から釣り道具一式を車に積み込み出発した。釣り道具は冬のカンカイ釣りのため芦別に持ってきておいたものだ。同僚の遠藤芳春氏がカンカイ釣りに行くと言う。豊岬方面へはいつも一人で行くらしい。私も一緒に行きたいので是非誘って下さいと懇願する。しかし、いつまで待っても誘いの電話は来ない。会議で同席した時に尋ねると、もうすでに行って来たと言う。結局、一度も出番はなかったわけである。

釣遊会仲間である嵐氏、堀内氏、阿部氏、大前氏、吉井氏が島歌川付近に展開すると言う。吉井氏は切樋川の予定であったが、岡氏の進言で島歌川に変更する。岡氏は自分の切樋川が荒らされるとでも思ったのだろう。島歌川が芳しく無くても近くに白岩漁港がある。白岩漁港に架かる栈橋の途中が壊れており海の中を漕ぐことになるが、それは、会の規約（危険防止のため防波堤の角には入れない）からいっても仕方がないことだと付け加えられる。